

中国海軍ニュース：艦載機 J-15S が試験飛行を開始

漢和防務評論 20180908(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国海軍の艦載機 J-15 の複座型、電子戦機と思われる機体が瀋陽で試験飛行を開始しました。

J-15 については、中国の宣伝報道では戦力化したように見せかけていますが、KDR によると、飛行制御技術に問題があり、中国海軍パイロットは信頼していない、とのこと。

戦時においては、安全に離陸できるかどうかの問題である、と。

KDR 東京特電：

2018 年 4 月、瀋陽で J-15 の複座型が試験飛行を行っているのが発見された。翼端には電子妨害ポッドが吊り下げられ、電子戦型である可能性が極めて高い。J-15 には空中給油型も存在する。少し前の時期に、試験用の 561 号機が出現し、2 基の国産太行エンジンを搭載していた。この 561 号機は、J-15 シリーズとしては初めて AL-31F 以外のエンジンを搭載した機体であった。しかし KDR は、J-15 シリーズがよい戦闘機であるとは思わない。また J-15S が大量生産されるとは思わない。

複座型の J-15 は、初期型の SU-35 或いはインド空軍の SU-30MKI に酷似している。すなわちカナード翼付きの複座で、折りたたみ翼、着艦フックが付加された。この未塗装の J-15S から複合材料の使用状況が分かる。複合材料は、水平尾翼、主翼部分に集中しており、全体で約 10%未満である。

ロシアは、初期型の SU-35 のエアロダイナミクスについて、未だに中国にライセンス生産を許可していない。設計思想は、概ねオリジナル版の”設計”思想 (SU-27UBK—SU-30 シリーズ—SU-30MK—SU-30MKI) と同じであろう。すなわち中国は、ウクライナから獲得した T-10K 試験機を基礎に上述の設計思想を結びつけて改修し、複座型を製作したのである。

J-15S は、依然入札段階にあり、海軍は未だ購入を決定していない？その理由は、J-15S の初飛行は 2012 年 11 月であるが、この間に、何種類もの J-15S が出現した？自己流で複製することが簡単でない証左である。J-15 の基本型の生産機数は限られており、生産速度も緩慢である。結局、J-15 の今後はどうなるのか？時間との勝負である。もし中国が次世代の国産艦載機を速やかに選定できず、J-15 を生産せざるを得ないのであれば、これで米海軍の F-18E/F シリーズに対抗することになる。これは相当無理な話である。KDR は J-15 がどんな飛行機かをよく知っている。

KDR が断言できることは、現段階で J-15 の飛行制御技術が未成熟であり、パイロット自身が信頼を置いていない。真に高強度の戦闘になった場合、まともに離陸できるかどうかの問題なのである。この戦闘機の事故率は極めて高い。

オリジナル版の SU-33 をはるかに超えている。スホーイ設計局の主任設計師は当時 KDR に次のように述べた:T-10K の 7 号機は最初の試験飛行用試験機だったが、試験中に多くの問題が出現した。それ以後、7 号機に対して多くの改修がなされた。これらの改修の内容は、当然中国人は知らない。

電子戦機としての J-15S は、同様に艦載攻撃機である。J-16 と同じように YJ-91 或いはその他の対艦、対地ミサイルを携行する。単座の J-15 は制空に用いられる。

その他の写真の中に、J-16 が主翼の先端に電子戦ポッドを吊り下げている写真があった。外形は J-15 のものとはやや異なる。妨害の対象が使用するレーダーの形式、種類、アンテナ外形、周波数範囲が異なるので、海軍と空軍は、電子戦ポッドを別々に開発したようだ。J-15S に取り付けられた妨害ポッドは、外形が F-18G に搭載された AN/ALQ-218 に多少類似している。後者は翼面を持っているが J-15 のポッドにはない。J-15 が大量生産できない状況下において、J-15S が試験飛行を完了したかどうか証明することはできない。最終的に部隊に装備されるかどうか？疑いが残る。

以上